

## 【大会コントローラー報告】

大会コントローラー 吉村 充功  
同補佐 諏訪 高典

### 1. はじめに

大会コントローラーは、インカレ実施規則第 32 条に規定されているとおり、日本学連を公式に代表し、主管者（インカレ実行委員会）に対して派遣される。主な任務は、実施規則が遵守されていることを確認し、地図の正確さ、作図・印刷の妥当性やコースの適格性、スケジュール全体などを確認することが主な任務である。

本インカレでは、2002 年秋頃、大会コントローラーである吉村が派遣され、ML 上での議論等をチェックしている（この時点では実行委員会が非公式のため派遣も非公式である）。吉村による事前の現地確認は 2003 年 3 月に本戦およびモデルイベントの下見、12 月実施の試走会で行った。また、任務の集中および正コントローラーの居住地が遠隔（派遣後、転勤により九州に移住）である不利さを防ぐため、2003 年 10 月より実施規則 32.6 に則り、大会コントローラー補佐として諏訪が派遣された。補佐の任務としては、主に毎回の試走会での現地確認、実行委員会会合での助言、指導を中心に活動した。以下、本インカレの特徴的な点について述べる。

### 2. 関西では 7 年ぶりのインカレ開催

関西地区での春のインカレ開催は、1996 年度の奈良インカレ以来 7 年ぶりの開催となった。関西地区では、2000 年に滋賀インカレショートを開催しているが、これを含めても 3 年ぶりとなる開催であった。このように開催感覚が大きくあいたことは、経験豊富な実行委員を十分に確保できない事態となっており、一部の実行委員には非常に負担が集中していたように思う。また、近年の参加者の減少傾向にあわせ、実行委員の数もかなり絞った形となったが、必ずしもそれに見合った形での仕事の効率、削減化までには至らなかった。さらに、今回、幹部クラスの実行委員は大学院 2 年生（M2）が多く、修論の提出時期とインカレ準備の佳境時期が重なったため、かなり無理を強いた形になったのではないかと思う。次年度以降、インカレ改革により開催形態が変化するが、今後も継続的なインカレ開催とするためには、適度なインカレ経験を持つ実行委員の確保、および参加者規模にあった運営形態のスリム化は必須事項であろう。

### 3. MTB-O 開催などの新たな試み

今回のインカレでは、参加者増および地元、メディアに対するアピール等を目的に新たな試みが多くなされている。昨年度より正式に併設開催されているトレイノレ 0 のモデルイベントを含めた開催を始め、新種目としてマウンテンバイク愛好者を主なターゲットにした MTB-O の開催や、一般学生クラスの参加者もより楽しめるように山川克則杯を創設する

などの趣向を凝らした催しなどがなされた。また、日程的な理由により実現することはできなかったが、地元小学生を対象にしたオリエンテーリング大会の開催を打診するなど、実行委員会では積極的な取り組みがなされている。これらの多くは大きな負担を伴うことなく実施できており、今後も継続的に実施していくことが、インカレの底辺を拡大していく上で重要であろう。

#### 4. クラシック選手権スタートの一時中断

クラシック競技当日に実行委員会より説明のあったとおり（本報告書でも記載）、当日のレース最中に、選手権コース上で伐採が始まるという事態が生じた。倒木が沢に流されているとの情報もあり、選手の安全を考え、スタートの一時中断という措置を執った。通信手段の限界などで中断時間が予想以上に長くなってしまい（実行委員会の連携、判断は、可能な範囲では迅速であった）、再ウォームアップ時間の確保などに努めたとはいえ、後発の選手には少なからず影響があった感は否めない。結果的に事なきを得たが、ラストスタートまで10分を切っている段階での措置であり、実行委員会共々非常に難しい判断に迫られた（実際にはすでにスタートしてしまった選手を止めることができない状況であり、これらの選手に対して管理者は重大な責任を負っている）。なお、事前渉外なども問題なく行われているが（むしろ、通常の大会より連絡が取れており、全般的にスムーズであった）、すべての地権者を割り出すことや当日の情報を収集するには限界がある。加盟員各位に当たっては、オリエンテーリング大会にはこのように地元交渉に限界があることを十分承知していただくとともに、私有地を使用するオリエンテーリングの特性を改めて十分認識してほしい。また、述べるまでもなく、選手の安全確保は競技よりも優先されるべき事項であり、同様に地元の権利も競技より優先されるべき事項である。これらの優先事項を見誤ることは、オリエンテーリング競技そのものの存続に関わる問題であり、十分注意が必要である。

#### 5. クラシック選手権優勝時間が設定時間と大幅乖離

クラシック・ディスタンス競技のウイニングがMEは66分、WEは58分と、設定に対して大幅に短くなった。特に男子は10分以上も短く、実行委員会および大会コントローラーの判断ミスとしか言いようがなく、深くお詫びする。このような事態が生じた点について考えられる理由は、以下の通りであり、いくつかの条件が重なっている。1つ目は当日のコンディションが最高に近い状況であり（天気、気温、湿度ともここ最近ないぐらい絶好）、タイムが伸びやすい状況であった。2つ目は最終試走時とその後の最終地図調査によるコース精度の違い。3つ目は学生レベルの読み間違いである。これらにつながる要因としては、MEクラスの試走では国内有力選手を含めた試走者全員のベストレグタイムを積み上げても75分であったため、インカレ当日の雰囲気や天候などを考慮しても、70分前半まではタイムが伸びないと判断していた点が上げられる。また、インカレ1週間前の週末は積雪

しており、このようなコンディションの変化が予想されることが、ウイニング予想をさらに難しくしている要因である。

ウイニングの予想については、近年、十分コントロールされている状況とは言い難い。試走要員の確保や地図精度との兼ね合いをどうとるかなど、抜本的な解決策を模索していく必要がある。

#### 6. 男子リレーの完走率が上昇

男子リレーについては、1人あたりのウイニングが40分に変更されて2年目を迎えた。コースウイニングがこちらの予想より2,3分早い状況であったとはいえ、トータルの優勝タイムは結果的にウイニング設定に近い240分強であった。これは、これまでのインカレと比べ格段に短くなっており、結果として男子の完走率を押し上げた(26校中20校完走)。一方で、女子は完走16校(23校出走)となり、完走率は低下傾向にある。選手権としてふさわしいコースの維持を図り、完走率をいかに保つかは、今後の参加者数を確保していく上では重要である。

また、今年は男女とも優勝争いが最後までもつれ、さらに従来と比べ間延び感があまりなく、リレーとしての醍醐味を發揮できたのではないかと考える。今後とも、このような方向性を維持することが望ましい。

#### 7. リレーのリスタート前の失格チームが0

例年、不運にもペナ、地図の取り間違い等により失格となるチームが少なからず見受けられた。今回のインカンでは、男女ともリスタート(ウムスタート)前の過失による失格がなかったことは特筆すべきことである。リスタート前に失格となると、後続の出走ができないなど、チームにとっても悲しむべき事態となる。今後とも各加盟員にあつては、過失によるペナ等に留意し、競技を盛り上げてほしい。」

#### 8. おわりに

本インカレでは、実行委員会が、表舞台にあがっていないことを含め積極的に新しい試みを展開しており、非常に感謝している。すべては、インカレの継続開催を願う、OB・OGとしての思いが根底にある。今後とも、インカレが継続開催できるよう、各加盟員も一層努力いただくとともに、卒業後にはぜひインカレ実行委員として、インカレ開催に関わっていただきたい。